

よろずは

平成二五年

二月号

タイトルの「よろずは」は、「万葉」を訓読みしたものです。

万葉文化館 おすすすめ万葉歌

鯨魚取り 海や死にする
山や死にする
死ぬれこそ 海は潮干て
山は枯れすれ

万葉集 卷十六―三八五二 作者未詳

【意識】

くじらを取るという海は死ぬだろうか、山は死ぬだろうか。死ぬからこそ海は潮が引き、山は枯れるのだ。

海や山は「死ぬ」のだろうか――この歌は、そんな命題を投げかけています。何をもって「死」ととらえるかにもよりますが、この歌の作者は、潮が引き山が枯れることを「海や山の死」と考えたようです。海や山にも死があるのだから、当然、人間も逃れられない：という仏教的な教えを説いた旋頭歌です。

私たち人間は、体をつくる細胞の一つ一つが、生まれ、活動し、やがて死んで、と絶えず代謝を繰り返すことで、一個の生命体として「生きて」います。そして、その細胞を構成する元素は地球上にあまねく存在します。まさに海や山でもあり得る物であり、「人間は自然の一部である」とは、説教でも観念論でも詩的な比喩でもなく、単純な事実です。

潮は引いてもまた満ち、山は枯れてもまた芽吹きます。古代の詩歌や物語からは、「死」が「再生」を内包するものと考えられていたことがうかがえます。

【万葉古代学係】